

「清宗記念館」グランドオープン

京都 清宗根付館の姉妹館として「清宗記念館」が、2025年4月1日(火)にグランドオープンしました。佐川印刷株式会社 取締役名誉会長 木下宗昭が館長を務め、館長自らが尊んできた『出会い』と『挑戦』に導かれ、呼応した芸術家たちによる唯一無二のコレクションを展覧できる美術館です。是非、足をお運びください。



開館告知新聞広告 (3/30 読売新聞・3/31 京都新聞)

数奇な運命に彩られた 現代根付の歩み

第三話 現代根付誕生秘話 外国人コレクターとの運命的な出会い

今回は現代根付誕生前夜として、戦後海外からの需要に応えるように工房による象牙の置物や根付が生産されていた 1960年代後半までを見てきました。今回は現代根付の誕生に迫って参ります。

1970年代前後の日本は、一億総中流と謳われた経済的成長を背景に、既存の価値観に疑問を持ち、社会変革や自己啓発へと向かった時代でした。当時の若い象牙職人たちの中でも自由な創造や自己表現の手段として、根付の独自性に目を向けるようになりました。戦後から続く輸出向けの象牙置物や根付に求められたのは七福神や十二支などの古典的な題材の踏襲であり、工房での分業による効率的な生産体制でした。そうした体制のなかで若い象牙職人たちは、世界的なモダンアートの潮流に触発され、他の美術分野同様に作家が素材の選定から創作までを一貫して行う作家一作主義を始める動きが見られました。それは従来の徒弟工房制から脱却を求める根付界の変革を予兆させるものでした。

そうしたなか1971年に親日家として知られるアメリカ人根付コレクターであるロバート&ミリアム・キンゼイ夫妻^{※1}が来日して根付作家たちと交流する機会を持ったことは大きな契機となりました。キンゼイ夫妻は根付作家たちに対し、江戸時代以来の伝統に依りかかることなく、現代的な感覚で個性を発揮した根付を制作するように強く勧めました。動物彫刻を得意とした齋藤美洲氏はブランクーシなどの西洋

彫刻の造形感覚を採り入れ、幾何学的な抽象形態をいかし、「着水」1971を発表し、清新な印象を与えました。

若い作家たちは自分たちの方向性を再確認するとともに、背中を押されるように創作への意欲が高まり「現代根付」運動につながりました。その中心となったのが、齋藤美洲氏、立原寛玉氏、桜井英之氏、駒田



齋藤 美洲「着水」象牙 高3.5cm 1971

柳之氏でした。1977年に『Contemporary Netsuke』(ミリアム・キンゼイ著)が出版され、同年に作家たちによる根付研究会も設立され、後に外国人作家も参加して国際根付彫刻会へと発展して現在に至ります。

※1 ロバート・キンゼイ氏 (1916～2015)は米国空軍将校として任務し、終戦直後の1945年から一年間帝国ホテルに滞在。その際ホテルのアーケードで根付を見たことで蒐集を始めました。米国ウエスタン航空会社社長として活躍し、国際根付ソサイエティでは会長を歴任し、国際親善文化協会の会長も務めました。現代根付蒐集の第一人者と知られ、当館館長木下宗昭とも親交を深めました。

2025年7月～9月の特別企画展のご案内

根付で見る日本の魅力 『あっぱれ! ニッポン』展

- 7月 「芸能の華」展 ■ 7月1日(火)～31日(木)
- 8月 「妖怪たちの夏休み」展 ■ 8月1日(金)～31日(日)
- 9月 「侍と花魁」展 ■ 9月2日(火)～30日(火)

京都 清宗根付館 公式ホームページのTwitter、Instagramにて、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

第9回 水木十五堂賞受賞(奈良県大和郡山市より授与)、家庭画報(目次頁)に毎月掲載、NHKプレミアム「美の壺」出演



公式サイトはこちらから▶



佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。

京都 清宗根付館とは

当館は、佐川印刷株式会社 取締役名誉会長 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね(宗)とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、<魅せる><育む><繋がる>を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。



現代根付

Contemporary Netsuke Newsletter

Salon

[目次]

- 企画展の見所
- 根付館便り
- 現代根付の歩み

[発行元]

公益財団法人 京都 清宗根付館
〒604-8811 京都市中京区壬生
賀陽御所町46番地(壬生寺東側)
電話 075(802)7000
www.netsukekan.jp/



日本で唯一の現代根付専門美術館 京都 清宗根付館『企画展』のご案内

現代作家たちの飽くなき挑戦。『根付の未来地図』展

根付は賞玩される美術品と、愛玩される工芸品の領域をせめぎ合いながら、世界に類を見ない日本独自の彫刻表現として継承されてきました。そして現代根付作家たちの挑戦はとどまることなく拡張を続けています。本展は現代根付の最前線を概観しながら、根付の未来地図を予見しようとする試みです。時代により紆余曲折はあったものの、根付には日本の幅広い工芸技術が活用されています。他の芸術分野では、材質や技法などの違いでジャンルが変わりますが、根付は手のひらに収まる大きささと丸みを持った造形、紐を通す孔があるという条件さえ踏まえれば、素材や技法、題材、表現方法に至るまで作家独自の発想や美意識を自由に表現する

ことができます。その垣根のない根付の寛容さにこそ総合芸術たる根付の神髄をみることができます。その根付の特徴を示しているのは江戸時代の天明元年(1781)刊の『装剣奇賞』であり、そこには根付工56名(再販で1名追加)が紹介され、仏師、能面師、絵師、蒔絵師、欄間師、入れ歯師、鋳物師などが列記されています。当時から根付には諸種の職人たちが参加し熟達した技芸を競い合っていました。日本の彫刻技巧やあらゆる工芸様式が根付に集約されたといっても過言ではない根付の世界が、これからどのような未来地図に書き換えられるのでしょうか。本展ではその技法の多様さを手掛かりに探って参ります。



告知ポスター

4月 ■ 4月1日(火)～30日(水)
 まるで生きるが如し、躍動の瞬間

「超絶技巧の彫刻美」展

根付の多くは一塊の素材から削り出す「丸彫り」から生まれます。素材を足せないために失敗が許されない緊張感は観賞者にも伝わってきます。硬い素材でありながら、今にも動きそうな気韻を湛える超絶技巧は、到底人間業と思えないという感動とともに「神工鬼斧(しんこうきふ)」と賛美されます。根付の魅力は凝縮された造形と、誇張された表現といっても過言ではありません。日本彫刻は飛鳥時代の仏像に始まり、安土桃山の絢爛な欄間彫刻、江戸の工芸諸般の充実、明治のアカデミズムの導入、昭和の抽象主義を経て、現代の根付作家がどう収斂させるのかが見所です。

5月 ■ 5月1日(木)～31日(土)
 世界が驚いた、日本工芸の極み

「漆芸の深い輝き」展

漆は海外で「JAPAN」と呼ばれるほど日本特有の発展を遂げました。漆は温暖湿潤な環境で育つことから日本の気候に向き、縄文時代早期から使用され、日本各地で独自の技法が伝えられています。漆は美しい塗り肌をもたらし、江戸時代には根付や印籠にも使用されました。加えて螺鈿や蒔絵、沈金、などの加飾は華美で典雅な情趣を醸し出すことから諸大名にも好まれました。現代では伝統的技術をさらに発展させて、立体的な彫刻に施したり、紅花緑葉(こうかりよくよう)と呼ばれるように多彩な色漆を重ねて立体的に彫り込んだりして根付に応用するなど現代的な試みがなされています。

6月 ■ 6月1日(日)～29日(日)
 希少素材の華麗な組み合わせ

「金工・象嵌の格調」展

金工や象嵌には数種類の特性が異なる素材を嵌め込む熟練の技術が必要とされます。金工は江戸時代に刀装具において世界最高水準の技術に達しました。その後西洋の宝飾技術が導入され、平成には宝飾や貴金属加工から根付作家への参入もあり、現代根付において重要な技法となりました。また象嵌の古例は正倉院に「木画紫檀槽琵琶(もくがしたんのそうのびわ)」などの作例を先駆として、金工象嵌、木工象嵌、陶象嵌などに応用され、根付でも象嵌技術が使われました。明治時代には芝山象嵌が欧米への輸出品として一世を風靡し、現在においても根付に受け継がれています。



山本 伊多呂 (1961～)
 「伐折羅の童」 高6.7cm
 黄楊

伐折羅(ばさら)大将は薬師如来の眷属十二神将に属し、頭に犬を載せる戌神として知られる。作品では子犬と戯れる童に仮託している。



穴戸 濤雲 (1960～)
 「枇杷葉湯売り」 高3.1cm
 象牙

枇杷の葉と漢方薬を煎じた「枇杷葉湯」。暑気払いの売り声を響かせながら、天秤棒を担いで町を流す行商は夏の風物詩として親しまれた。



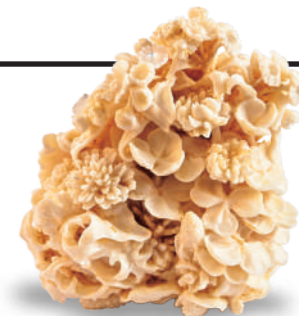
及川 空観 (1968～)
 「内緒話」 高4.0cm
 象牙・トルコ石・べっ甲

主人公の姫に魔女がささやくのは、何かのお告げか、恋の指南か、運命の定めか、異世界への誘いか、さて、いったい何を話しているのか?



森 哲郎 (1960～)
 「勇猛 張飛」 高5.4cm
 黄楊

一塊の黄楊から彫り出す丸彫りの手法で、徹底した観察力で写実を追求している。前傾させた動勢からは武人の気迫を感じさせる。



佐々木 明美 (1959～)
 「春の野にいでて」 高4.3cm
 象牙・白蝶貝

春から初夏にかけて様々な花が咲き乱れる野辺の様子を作品に。象牙の塊から可憐な花々を透かし彫りしているのは超絶技巧の極致である。



雲龍庵 (1952～)
 「宝尽蒔絵根付」 高2.0cm
 桐・漆

宝尽くしの図となる部分は立体的に盛り上げる高蒔絵を使用している。文様以外の背景を梨地の地蒔きにして高蒔絵をさらに引き立たせている。



宮崎 輝生 (1936～)
 「宮根付」 高4.0cm
 黒柿・白蝶貝 他

「美人」にも形容される芙蓉(ふよう)の花。漆を何度も塗り重ねたあとに磨いて光沢を出した「呂色塗」を地にして芝山象嵌を施している。



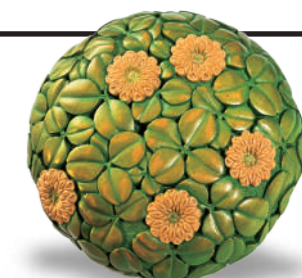
針谷 祐之 (1954～)
 「鶴の舞い」 高4.2cm
 琥珀・漆・金

鶴は長寿や夫婦円満の象徴で、末永い幸せを願う縁起の良い題材。琥珀に平蒔絵を施す。翼は羽の境界を塗らない描割技法が使われている。



井尻 朱紅 (1954～)
 「恋の季節」 高4.2cm
 象牙

漆に薄貝を埋め込み、研ぎ出す螺鈿は漆の加飾方法のひとつで、作品に幽玄の美しさを与える。砂子を蒔いた蒔絵や色漆など様々な技法を重ねている。



弓削 祥陽 (1947～)
 「幸」 高2.1cm
 黄楊・漆

素地に繊細な彫刻を施し、色漆で塗り分けている。葉だけを研ぎ出して素地の黄楊を透けるようにしたこと、全体に温かみを感じさせる



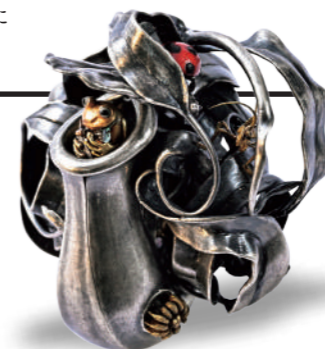
上原 万征 (1975～)
 「しりとり」 高2.2cm
 鹿角・銅・銀925 他

言葉遊びのしりとりを手掛かりに、謎解きをする趣向の作品。様々な素材の活用で熟練の技術が光る。麻の葉→ハート→トカゲと続いていく。



由良 薫子 (1993～)
 「パトロール」 高1.8cm
 磁土

磁土に釉薬をかけ焼成した作品。根付らしい形状にまとめている。オニヤンマは同じ場所を何度もパトロールする習性があり題名にしている。



吉見 普光 (1954～)
 「鞠鬘」 高4.7cm
 銀925・黄銅・水牛角 他

食虫植物で知られるウツボカズラを棲み処とする珍しいカエルがいることに着想を得た作品。可動式でウツボの中から蛙が顔を出す。



穴戸 濤雲 (1960～)
 「蛸壺に伊勢海老」 高2.4cm
 黒檀・金

江戸時代は新興都市の江戸では土木事業などで男手が多く必要とされた。そんななかで、粋で鱈背(いなせ)な男の美意識が高まった。



黒岩 明 (1949～)
 「竹虎」 高2.9cm
 象牙・漆・金

彫金・彫刻・漆芸をこなす多彩な技巧が集約されている作品。竹林は虎にとって安住の場所とされ、縁起の良い組み合わせとされる。